

『イスラエル紀行』における現代人の譎妄、 催民、昏睡状態

北 川 典 子

はじめに

ソール・ベローは1975年秋から冬にかけて、第二のホームタウン、エルサレムに妻アレクサンドラと共に三カ月程滞在した。帝政ロシア下の迫害を逃れてカナダへ移住したユダヤ人を両親とし、東欧ユダヤ人の辿った運命を心に深く刻み込んだベローにとって、イスラエルの存亡は常に胸中から離れぬ問題であり、彼はそれ迄にも『ニューズデイ』の記者として6日間戦争取材のため、或いはヘブライ大学での講演のためなど数回に亘ってイスラエルを訪問している。『イスラエル紀行』(To Jerusalem and Back: A Personal Account) は1975年の滞在時の体験を基として1976年に発表された一種のルポルタージュともいべき作品で、ロンドンからエルサレムへ向かう機内を描写する導入部、現地でのベローの活動、観察、及びそれらに刺激された政治的、哲学的思索を綴る中心部、及び帰途ロンドンとアメリカ帰国後のベローの会見、思索をまとめた末尾の部分から構成されている。

エルサレムに到着したベローは、Rabin 首相、元外相 Abba Eban ら政府要人、及びヘブライ大学の Shlomo Avineri 教授、Talmon 教授らと精神的に会見を重ね、イスラエルを取り巻くアラブ諸国、アメリカ、ソ連の動向、パレスチナ問題と国際世論、キッシンジャー外交、世界に今尚根強く残る反セミ主義、イスラエルの存亡と世界に離散したユダヤ人の関係などについての彼らの意見に耳を傾け、又、それらに関する膨大な量の書物、論文を読み、思いを馳せ、イスラエルのサバイバルの道を模索した。ベローは又こうした会見、読書の合間をぬって、ソ連からイスラエルに移住してきたいとこ達、身内の殆ど全員を失った旧友 John Auerbach らとの再会の一時を楽しみ、旧約の昔を髣髴とさせるエルサレム旧市街、天上の平安を漂わすシオン山、古代墓地などを散策し、Harold Schimmel, Dennis Silk ら詩人達と大いに語り合っ、苦難に満ちたユダヤ人の連綿と続く歴史を想起すると同時に、政治に否応なしに巻き込まれざるをえない現代における芸術家の真の生き方をも模索していった。

この作品が発表された当時は、中東問題に関するベローの報告、政治的分析に対して厳し

い批評も決して少なくはなかった。例えば Steven Lavine は、ベローの報告には何ら目新しいものはなく、その分析は表面的散発的であり、総じて “As a work of political and social analysis, Saul Bellow’s *To Jerusalem and Back: A Personal Account* is more than a little disappointing”⁽¹⁾ と述べている。しかし Lavine は、混沌とした現代社会に対して理性によって秩序を与えようとして挫折するハーツォグ、サムラーら小説の主人公達と、この紀行文におけるベロー自身との共通点を見出すことにより、ノンフィクションの分野におけるベローの主題の表現としてこの作品を捉え直し、この紀行文に隠された新しい魅力を発見している。

However, when one recognizes the similarity between Bellow in *To Jerusalem and Back* and the heroes in his earlier works, a new perspective opens up. Perhaps Bellow has never really intended social and political analysis as the primary objective of *To Jerusalem and Back*, but rather has attempted to dramatize in a non-fictional context the concerns that have occupied him in his fiction. ...⁽²⁾

ノンフィクションの分野におけるベローの主題の表現として『イスラエル紀行』を促える見方は他の批評家達によっても指摘されているが、中でも Irving S. Saposnik は、この紀行文においてベローが実際に会見した政治家、思想家達とフィクションにおける登場人物との類似、両作品に見られる循環的構造、イスラエル対アメリカ、或いはソ連対アメリカ間の対立とベローの文学世界を特徴づける内的分裂との同質性⁽³⁾などを引きつつ自論を展開している。確かに『イスラエル紀行』におけるベローの思考は、彼自身 “. . . sometimes it comes over you that reasonable adjustment may be the remotest of possibilities. Occasionally the true nature of the subject bursts forth”⁽⁴⁾, “. . . this subject resists clarification” (p. 175) と述べているように、こうしたルポ形式の作品に期待される明晰、統合へとは向かわず、寧ろ彼独自の個人的回想、想念へと流れがちであり、相矛盾する要素を見聞したまま或いは脳裏に浮かぶままに書き綴るという傾向をもっている。又、老獪な大人とナイーブな子供と例えられた米ソ関係⁽⁵⁾、自己正当化の余り自閉症的症状をきたしたと描出されるイスラエル⁽⁶⁾、自己への期待過剰のために自己告発癖に冒されたアメリカ⁽⁷⁾などは、アドラーとウィルヘルム、ハーツォグ、ジョーゼフその他ベローのフィクションの多くの登場人物達と強い類似性を共有している。つまりベローは『イスラエル紀行』執筆時にも従来の作品で追求してきた様々のテーマが脳裏から離れず、これらのテーマがこのルポ形式の作品の底流を流れる結果となったと考えられるだろう。

そこで本稿ではこうした観点からこの作品に光をあて、まずイスラエルの存続を国内及び

国外から脅かす要因として繰り返し表現される現代人の譫妄、催眠、昏睡状態が、ペローの文学世界を一貫して流れる一種の象徴的状态であることを概観する。次に、この状態に付随するいくつかの特徴が、『イスラエル紀行』においては個人のレベルではなく、中東問題や米ソ二大国の関係、反セミ主義など、極めて時事的であり一見文学的とは思えない事象を素材として発展してゆく過程をみることにより、むしろフィクションの分野では捉えにくい催眠状態の諸相を明らかにし、ペロー文学における現代人の危機的状況を理解する一助とした。

I

『イスラエル紀行』における現代人の譫妄、催眠、昏睡状態に関する表現は、“drowsy”, “hypnotic”, “chloroformed”, “lethargy”, “intoxicated”, “deluded”, “doped”, “living in a fog”, “illusion”, “sleep”, “dream”, “nightmare” など多岐に亘って反復されるが、ペローが現代人の置かれた状況をこのように表現し始めたのはいつ頃からだったのだろうか。

ペローは処女長編『宙ぶらりんの男』において早くも、友人サーヴェイシャス家におけるパーティーの一コマとして余興の催眠術を導入し、このパーティーにのみ登場する端役ともいべき Mina Sarvatiuous の催眠術をかけられた姿を「人類全般、しかもその哀れな姿」の象徴として描出している。

She (Mina) lay loosely outstretched, a strong light behind her turned against the wall. One of her sandals had come unfastened and swung away from her heel. Her hands lay open at her sides. One noticed how narrow and bony her wrists were and the mole between two branches of a vein on her forearm. But for all the width of her hips, and the feminine prominences, her knees under the dress, her bosom, the meeting of her throat and collar-bones, she looked less specifically like a woman than *a more generalized human being—and a sad one, at that.* This view affected me greatly.⁽⁸⁾ [斜体字筆者]

上記の引用はジョーゼフが友人宅で、余興の催眠術にかかった女主人ミナを友人達と見ながら、強い衝撃を受ける場面である。彼女は夫と、同席している彼の浮気の相手の言動に不満を鬱積させ、パーティーの始めから視線が定まらない程酔っている。やがて同席していた昔の婚約者に特技の催眠術を披露させることを思いついた彼女は、嫌がる彼を強引に説きつけ、自ら被験者を名乗り出、寒くもないのに悪寒を感じさせられたり、朦朧とした意識の中で懸念に数を数えさせられたりした挙句に、急に目覚めて泣き始める。このサーヴェイシャス家のパーティーは、全体として、一見親しい友人達の楽しい集いのように見えながら、実際は苦悶の情景を目撃することにより侮蔑や憎悪や欲望を一時的に解放したり充足させたり

する古代エレウシスの祭の現代的無秩序版であり、現代人が社会生活の中で心に鬱積させた敵意や憎悪を秘そかに放出する恐ろしい情景として描かれている。ジョーゼフにとってこのパーティーは、残酷や流血を禁じ、盟友達でつくった“colony of the spirit”⁽⁹⁾という人間の善性を基礎とする“ideal construction”⁽¹⁰⁾の崩壊を認識させる契機となる衝撃的な事件として重要な位置をしめている。このパーティーで女主人ミナは夫の浮気という現実から目をそむけて酒を飲み、かつての婚約者の催眠術へ自ら身を任せ、彼の秘かな残虐と復讐の餌食となりながら、目が覚めた時には虚しく夫の名を呼ぶのである。このミナの姿は、相手が昔の婚約者、現在の友人であり、又彼女が抵抗できない状態にある為、一層彼の慇懃な偽装の背後に潜む凶悪さと、強気だった彼女の一変した脆さ、はかなさ、危なげな様子が鮮明に浮かび上がる。ミナを配して表現したこの催眠状態は姿を変えて、悪酔いしたジョーゼフの妻が帰宅後のベッドの上で、裸で横になり手首を目に当てて電灯の光りを遮り無意識の内に眠り続けようとする姿や、サーヴェイシャス家のパーティーなど恐るべき現実を目のあたりにしながらもショックの余り対応しきれないジョーゼフが“narcotic dullness”⁽¹¹⁾に陥る様子などに繰り返されるのである。催眠、譫妄、昏睡状態に触れている箇所は「宙ぶらりんの男」では比較的短いが、それらは以上見てきたように、「危険と欠陥」⁽¹²⁾に満ちた世界や「汚く残忍で短い」⁽¹³⁾生存という現実を回避し、拒否しようとする人間の安易であるが故に危機的な状況を表すものと考えられる。

こうした人間の催眠状態は、『オーギーマーチの冒険』、『この日を掴め』を経て、『雨の王ヘンダーソン』においては主人公が事ある度に立ち返る“the hour that burst spirit's sleep”⁽¹⁴⁾における「魂の眠り」となって作品の中央に躍り出る。財産、教養、家柄など全てに恵まれながらもどこかに心に満たされない思いを抱くヘンダーソンは、“I want”という正体不明の心の内奥の声に突き動かされ、アメリカ社会を脱出してアフリカ奥地のアーニュー一族の村に流れつく。部族の女王との接見を許された彼は、彼女の威厳と智恵に満ちた様子を見る内、長い間脱却することのできなかつた「魂の眠り」が破られる時が迫り来ることを予感し、胸を高鳴らせると同時に、彼女の的確な質問に導かれて、自らの昏睡状態の原因を次のように把握してゆく。

The world may be strange to a child, but he does not fear it the way a man fears. He marvels at it. But the grown man mainly dreads it. And why? Because of death. So he arranges to have himself abducted like a child. So what happens will not be his fault. And who is this kidnapper—this gipsy? It is the strangeness of life—a thing that makes death more remote, as in childhood.⁽¹⁵⁾

Oh, it's miserable to be human. You get such queer diseases. Just because you're human

and for no other reason. Before you know it, as the years go by, you're just like other people you have seen, with all those peculiar human ailments. Just another vehicle for temper and vanity and rashness and all the rest. . . . These things occupy the place where a man's soul should be.⁽¹⁶⁾

ここに記されているのは、存在の意味を模索しつつも虚無と死の暗闇に行き暮れ、恐怖の余り、子供のように目を塞ぎつつ虚偽の価値体系にすがりつき、その命ずるがままに悪戦苦闘を重ねた拳句に他者にも自己にも限り無い憎悪と憤怒を抱いてゆく人間の様相であり、「この日を掴め」のタムキン博士の説く様々な病弊に侵された“pretender soul”⁽¹⁷⁾の状態に通じるものである。この他昏睡状態の破れる時への予感が“... I [Henderson] keep thinking about the spirit's sleep and when the hell is it ever going to burst. So yesterday, when I became the rain king—oh, what an experience!”⁽¹⁸⁾, “. . . I felt my hour of liberation was drawing near when the sleep of the spirit was liable to burst”⁽¹⁹⁾, “I guess I will never reach my object through it”, to raise my spirit from the earth, to leave the body of this death. . . . My life and deeds were a prison”⁽²⁰⁾などと表現され、ベロー文学において重要な位置を占める水の象徴、多くの作品で追求された自由と束縛などとの呼応関係が暗示されていることは、現代人の精神の昏睡状態が、ベロー文学の根幹と次第に広く深く関わって来ていることを示しているといえるだろう。

II

さて「イスラエル紀行」におけるこの譎妄、催眠、昏睡状態の意味合いを、イスラエルと西側諸国という二つの媒体を通して見てみよう。この紀行文は、イスラエルの存亡問題を中心として極めて現実的な国際情勢に立脚したものであるが、作品冒頭近くでの中東問題の叙述が、まずベローの処女作以来の世界と生存に関する基本的認識を明示するものとして注目される。

We forget, he [Navrozov] seems to think, that as a species we are generally close to the “state of nature,” as Thomas Hobbs described it—a nasty, brutish, pitiless condition in which men are too fearful of death to give much thought to freedom. (p. 19)

これはアメリカを取り囲むソ連の脅威、スターリンの後継者らの笑顔の背後に隠された本性への思いを、ベローがソ連の作家 Lev Navrozov の見解を想起しながら記述した部分であるが、それらは「宙ぶらりんの男」、「ハーツォグ」など多くの作品の底流となっているホブスの“state of nature”, 即ち「欠陥と危険」に満ちた世界、手段を選ばぬ自己拡大を図る「汚く残忍で短い」生存、そしてどのように忌避しようとその裏にはりついた自己の限界へ

の恐れ、更には最も底深い死への恐れゆえの呪縛などの認識として凝縮された形で披瀝されている。

John Hollander は『イスラエル紀行』におけるソ連の落とすこうした暗い影とイスラエルを取り巻くイスラム世界との類似性を指摘しているが⁽²¹⁾、ベローも上述したソ連の本性との同質性をイスラエルを取り囲みその存続を脅かし続けるアラブ諸国にも見てとっている。それゆえ彼は、アラブに関する様々な知的会話、討論を巡りながらも、彼らの最も根源的な狙いを Lamm, Kedourie, Laquer, らの意見の中に読み取るのである。Lamm はアラブ諸国の軍事力、経済力、政治力はいずれも強大であるとし、その強大な力を結集して隠健派の場合はユダヤ人の政治的撲滅、急進派の場合は物理的撲滅を狙っているという。この Lamm の見解は Kedourie, Laquer に通じるもので、両者は、アラブ諸国の目的はイスラエルの領土譲歩でもパレスチナ分割でもなく、又西洋文明が自論を無理に適用した反帝国主義、民族主義でもなく、ただ彼らがイスラム世界とみなす地域からのユダヤ人国家の一掃にあるという。ベローはその例証として Kedourie に見せられたエジプトの小冊子に終始一貫して流れるユダヤ人皆殺しの呼び掛けや1967年にベロー自身がシナイ砂漠で入手したナチタイプの漫画本、或いは斧でユダヤ人を殺しその肉を仲間の前で食べたというアラブ人のエピソードなどを繰り返し挿入しているが、ここで言及されたカニバリズムの中に「この日を掴め」などにおいて使用された人間の根源的な敵意の象徴としてのカニバリズムとの共通点を見て取ることも可能だろう。

このようにベローはイスラエルと対抗する勢力を極めて危険なものとして捉えているのであるが、ベローが会見したイスラエルの政府要人達の態度はベローの危機意識からは遙かに乖離したものだ。元外相 Ebban と会見したベローは、彼がソ連について capitalist democracy の破滅を狙い勢力拡大を図る非人間的な社会とは捉えていないことを知り、この Ebban の見解が多くのイスラエル人と、若干の違いはあれ、共有されていることを想起する。ヘブライ大学教授 Aveneri は、ハンガリー、ブルガリア、ルーマニアなど東欧での下層階級の人々の生活水準の改善に言及し、ソ連の衛星国家の中にモスクワからは独立した新しい Kommunismus が成長していることに期待をかける。一方、昼食を共にする機会に恵まれた Ravin 首相は、慎重に言葉を選びながらも、アラブの富裕化、近代化による戦闘から生産への興味の移行、石油にかわるエネルギーの開発によるアラブ諸国の弱体化への期待を述べる。ベローはこうした会見において聞き手、或いは観察者に徹しようと黙していることが多いが、心の中では次々と彼らの意見に反駁してゆく。イスラエルの Kommunismus への新しい期待を、ベトナム惨劇とアメリカ内政の混乱によるもの、或いはイスラエルのアメリカ一辺倒への反発によるものではないかを見ると同時に、東欧諸国の事情を多少なりとも知っていることと自認

する彼は、かの地ではいかに個人の自由が無いかを心の中で力説する。レバノンの血で血を洗う殺戮を思い、近代化がアラブ諸国の自信と緊張を増し逆効果となるという Kedourie の意見の方に同意するペローは、“Israel’s political leaders do not seem to me to be awake” (p. 131) と彼らの昏睡状態を告発する。

さらに一方では国会右派と結託した宗教的国粹主義者達が勢力を広げているが、彼らに関してもペローは Lamm の論文に深く共感しており、その内容を詳細に亘って紹介している。Lamm は初期のシオニスト達が領土を取り戻すことを究極の目的とするのではなく、流浪と迫害の中で絶えず生命を脅かされ絶滅の危機に瀕した人々の救済を目的とし続けたこと、自分達の力とその限界を正確に把握し力の論理に頼らず粘り強く努力を続けたことを挙げ、それらが現在にいたる過程でどのように変化してきたかを次のように述べている。即ち彼らは、Ben-Gruion が登場した頃から和平交渉よりも軍事力に頼るようになり、六日間戦争によって西岸、ヨルダンなどの領土を獲得することにより、遙か旧約の昔予言者達が通った道や列王達が戦った丘など父祖の土地への深い感情を呼び起こされ、建国の真の目的を決定的に見失うこととなったというのである。こうした強行派の意見としてペローは西岸を “promised land” (p. 70), 或いは西岸への入植を “God-given right” (p. 165) と主張して憚らない正統派ユダヤ教徒, “religious expansionism” (p. 165) を力づくで行使しようとする宗教的国粹主義者らの意見を紹介し、彼らが領土拡大主義によってアラブ諸国にプレッシャーをかけ団結させ危機を悪化させていることに気付かないと告発する。Lamm はこうした人々の精神の謔妄状態を “minds of public doped with empty slogans, living in a fog, avoiding reality” (p. 67) と描出しており、ユダヤ人が遠い昔の領土への権利に関して自己正当化に凝り固まった様子を “autism” (p. 66) と呼んだ。彼の “the rejection of actual reality and its replacement by a reality which is a product of wishfulfillment” (p. 66) という “autism” の定義には、ペローの処女作以来の “ideal construction” というテーマとの強い類似が認められると考えられる。ペローは同時にイスラエルの政府要人達がパレスチナ問題に関する国際世論、キャシンジャー外交などを巡るイスラエル・アメリカ関係の悪化に対して鈍い反応しか示さないことを強く懸念する。このようにペローは、イスラエルがソ連、アラブ、国際世論を巡って自ら良いように解釈し、内面の合理化を図っていこうとする状態にあり、一種の謔妄状態に陥っていると強い懸念を表明する。

* * *

次にペローはアメリカを始めとする西側諸国の状態に言及してゆく。まずアメリカを始めとする西側諸国がイスラエルを支援し続けることを明言しきれないペローの歯切れの悪さは、アラブ産油国に対する配慮や一般的な中東情勢分析によるところもさることながら、彼が独

自の観点からアメリカを始めとする西側諸国に積もり積もった疲弊，病弊をみているからと考えられる。“drowsy” (p. 84), “under a frightful hypnotic influence” (p. 84)などと描写される西側諸国のこうした状態についての鋭い批判は，ソ連の強制収容所で辛酸をなめてきた詩人，小説家達の“wakefulness” (p. 84)と対比されながら随所に繰り返され，以下に検討するようにこの作品全体の基底部を成すものである。

イスラエル滞在中に，Anwar Sadat のアメリカ訪問について意見を求められたベローは，アメリカ人が外国からの客人をアラビアン・ナイトのヒーローのようにもてなすこと，しかし彼らの愛が客人が帰った途端に忘れ去られる安っぽい愛であり，食事に招き，ローンを気前良く貸付け，盛大なパレードを催して自分達の善良さ，寛大さを示すことにより，客人達も自分達を愛するようになるだろうと思う込んでいることを述べ，アメリカ人が世間知らずの子供のように世界を全く理解してないのではないかと思いを馳せる。ベローはこのことを，ソ連とアメリカとの関係に敷衍してゆき，ソ連で辛酸をなめてイスラエルに移住してきたいとこ達の目に映る“amiable, good-natured, attractive perhaps, but undeveloped, helpless” (p. 19) というアメリカ人の姿や，Navrozov の“the Americans, as children at whom Stalins smile through their mustachios” (p. 18) という見方に共鳴する。つまりベローが捉えた米ソ関係とは，残虐にして恐るべき大人としてのソ連と，その前でなす術もなく立ち尽くす子供のようなアメリカという勝負にならない関係として提示される。そしてこのアメリカが向かっていかねばならない相手の正体が“state of nature”を基とするベローの世界と在存に関する基本的認識と結びついていることは前述した通りである。

ベローのこうした認識は，政治的，宗教的理由によって強制収容されているソ連の囚人達と深く結びついており，彼はロンドンで公開された Amnesty International の報告を引きつつ，かれらの飢餓，過度の労働，その他あらゆる人権を剝奪された惨状，射殺されることを目的とする逃亡，釘やチェスの駒などの下飲，自己の肉体の切開など悪夢的な地獄絵を詳細に紹介する。こうした囚人達について西側諸国は一体どれだけのことを知っているのだろうか，と問いかけるベローは，日々新聞に溢れる情報にもかかわらず自分達が本当に知らねばならない大事なことや「同時代の悪」に関しては何も理解していないことから，殆どの場合一種の催眠状態にあると次のように述べている。

With us in the West wakefulness, for some mysterious reason, comes and goes. Our understanding fires up briefly but invariably fades again. Sometimes I suspect that I am myself under a frightful hypnotic influence—I do and do not know the evil of our times. . . . I am forced to consider. . . whether we do not go about lightly chloroformed. (p. 84)

ベローは又，近年イスラエルに移住したソ連の作家 Mikhail Agursky からの手紙を紹介し，

アメリカが今日享受して人類史上未曾有の自由民主主義が、刻一刻と Ruskin のいう “the suicide of Greece” (p. 83) と同じような破局へと向かっているという彼の意見に賛同している。ベローは Agursky のイスラエルを新しい文明の中心にという主張は余りにもナイーブで真面目に論争する気はないと退ける一方で、人類が自由を手中にした期間は余りにも短く、自由について殆どなにも理解していないがために手中の自由をもて余り内部から腐食してゆくように自滅へと向かうという彼の意見に強く引かれている。しかし人類は自由とは一度手に入れば永久に続くものという幻想を抱き、自らの自由と繁栄をむさぼるのにかまけた。Agursky らは、アメリカ人が人類の長い歴史の上で自由と文明が与えられた期間はバブルのように短いということすら思いあたらず、自滅の淵にありながらも何も知らず浮かれ騒ぐ軽薄さを覚めた目で観察する。

こうして本来直視すべき恐るべき相手の正体も、自分達が享受している自由と文明に終わりがあっても気づかず、朦朧とした意識の中で浮かれ騒ぎ、自己拡大にのみ耽るアメリカを始めとする西洋文明には最早 reality を柔軟に捉える力は無く、只与えられた思想を鵜呑みにするのみである。ベローはいつの間にか掛けられる “butterfly nets” (p. 118) のように人々の心をごんじがらめにする “an intellectual-leader race of masterminds” (p. 118), 特にサルトルに非難の矛先をむけている。中東問題に関するサルトルへのインタビュー記事を読んだベローは、サルトルが中東問題に適用している帝国主義の概念が元を正せば1902年の Hobson の *Imperialism* から来た硬直化した代物であること、彼のイスラエル左派、アラブ諸国左派への期待が両者が極度に反目していることに対する無知に由来することなどを挙げて徹底的な反論を唱えている。こうした批判は、ベローがサルトルの思想の中に、明晰だが抽象的思考によって現実を切り捨てる傾向をみてとり反発しているからと言えるだろう。このように提示された思想を鵜呑みにする現象は Kedourie によっても指摘されている。Kedourie は、T.E. Lawrence が西洋諸国に初めてアラブ民族主義という概念を提示し、現実のアラブとは別物のロマンティックなハリウッド的英雄伝をうみ出したと言っているが、ベローはこれに共感しており、サルトルとロレンスの影響を共に “hypnotic” (p. 148), “hypnotically” (p. 118) と記している。

かくしてアメリカ文明は、ソルジェニーツェンの言葉によれば “full of tinsel, affluence, and emptiness” (p. 130) と成り果て、必然的に morality を失った存在と化してゆく。ソルジェニーツェンは、第2次世界大戦以降のアメリカ人が自らの “opportunities for expansion” (p. 129) の享受にかまけてスターリンにポーランドをはじめとする東欧での暴挙を許したことを、自己の享楽への不干渉と共産主義国独裁者の暴挙を引換えにする行為であると痛烈に批判し、いま尚それはデタントと呼ばれる宥和政策という形で続いているとしているが、ベ

ローはこれを彼らの譎妄状態に潜む倫理性の喪失として鋭く告発する。

ベローはこのようなアメリカを含む西側諸国の倫理性の喪失の中に、今なお反セミ主義が根強く残る理由を敏感に嗅ぎ取ってゆく。彼はイスラエルでサバイバルを巡る活発な討論に耳を傾け、旧約の時代からのユダヤ人の歴史を膚で感じる間に、次第に反セミ主義に対して敏感になってゆき、その要因を独自の観点から掘り下げていく。彼はまず、ユダヤ人の民族的特徴として世界と自己に対して法外な要求を突き付けるという傾向を挙げ、さらにその要求が倫理的なものであるが故にそれが今日世界の人々がユダヤ人に対して不快感を感じる要因ではないかという推測を、Jacques Maritain の20世紀ヨーロッパの反セミ主義を“an attempt to get rid of the moral burden of Christianity” (p. 15) とみなす言葉を引用しながら展開する。西側諸国は特殊な苦難の歴史を持つイスラエルに特に高い倫理性を期待してきた。その期待の高さは、世界中の数ある難民の中でもとりわけパレスチナ問題が注目を集め、一種の“moral resort area” (p. 136) と化した程であるわけであるが、一方では西側諸国がユダヤ人に課した“moral burdens” (p. 135) とは彼らにとっては最早自分達が守り切れずとうの昔に放棄してしまったもの、“a wraith in Europe” (p. 135) であることも臆げに意識している。ベローは西側諸国の人々がユダヤ人を忌避する要因の中に西側諸国の倫理性の欠如を嗅ぎとっていると見えるだろう。

西側諸国の人々のこうした態度が極限的な形で露にされたものとしてベローはホロコーストに対する彼らの反応を挙げている。ホロコーストは文明社会がその理想としてきた信仰、ヒューマニズム、自由など人間の尊厳の全てを粉砕した。サーヴェイシャス家でのパーティーにおいて「危険と欠陥」に満ちた世界、「汚く残忍で酷く短い」生存の侵入を目のあたりにしながら対応しきれなかったジョーゼフが「麻酔にかかったような感覚の鈍さ」に陥ったように、人々は人類の想像を絶する暗黒部分を突きつけられ、極度のショック状態、拒否反応を引き起こし、“lethargy”, “sleep” へと陥っていく。

These ideals were knocked to the ground by Fascist Italy, by Russia, and by Germany. The Holocaust may even be seen as a deliberate lesson or project in philosophical redefinition: “You religious and enlightened people, you Christians, Jews, and humanists, you think that you know what a human being is. We will show you what he is, and what you are. Look at our camps and crematoria and see if you can bring your hearts to care about these millions.”

And it is obvious that the humanistic civilized imagination is inadequate. Confronted with such a “metaphysical” demonstration, it despairs and declines from despair into lethargy and sleep. (p. 58)

ペローはホロコーストを“the humanistic civilized imagination”が理解し、受容することの到底出来ない現実、人類の手に遙かに余る暗黒として捉え、その前では、悲しみ、怒り、憎しみなどの人間的感情や言葉は失われ、ただ深い絶望、精神の麻痺と眠りがあるのみと語っている。このようにペローは、「欠陥と危険」に満ちた世界や自己拡大を図る「汚く残忍で短い」生存という世界と生存に関する基本的状況をアメリカを始めとする西側諸国の人々が直視することなく、譫妄、催眠、昏睡状態に陥っていることを述べ、従って、イスラエルの多くの人々が頼みとし、イスラエルに手をさしのべ救済せんとするかに見える「西側の良心」(p.38)なるものが、実際にはいかに脆弱で腐敗したものであるかを一貫して主張しているのである。

* * *

一方、既述の通りペローは、西側に対してのみではなく、イスラエル自身にも警戒を発している。ペローは文化人類学を専攻していた学生時代を想起し、タブーの食物を食べるよりは餓死を選ぶといわれているエスキモーを調査することにより、人間がどの程度文化や生涯を律する先入観に従うのか、又、生存したいという動物的欲求が、習慣や信念という制約の限界を越えて現れるのはどの程度の状況からなのかという点を明らかにしたいと考えていたことに言及する。当時の彼は、文明人の方がタブーの制約から解放されているだろうと考えていたが、現在のペローは最早そうした確信は到底もてないという。つまり、文明人の方が reality を柔軟に把握し、絶滅の脅威に対して敏速に反応するとは思えないというのである。彼はイスラエルの指導者達が自分達を救出する方法について恐ろしい程無知なのではないかと問いかけ、ホロコースト時のユダヤ人達について、彼らがナチの魔手が刻一刻と忍び寄る中でよもや自分達が六百万のユダヤ人同胞と共に殺戮されるとは思わず、住み慣れた家、快適な生活、財産などに固執したが故に結局は大量虐殺へと追いやられたという最も厳しい批判をする作家達の見解を引き合いに出す。そしてかかる歴史の悪夢が二度と繰り返さないように、歴史的ともいえる深い眠り、即ち昏睡状態から目覚めるようにとペローは強く呼び掛けるのである。

... if history is indeed a nightmare, as Karl Marx and James Joyce said, it is time for the Jews, a historical people, to rouse themselves, to burst from historical sleep. (p. 131)

註

- (1) Steven David Lavine, "In Defiance of Reason: Saul Bellow's *To Jerusalem and Back*," in *Studies in American Jewish Literature* 4.2 (1978), p. 73.
- (2) *Ibid.*
- (3) Irving S. Saposnik, "Bellow's Jerusalem: The Road Not Taken," in *Judaism* 28.1 (1979), p. 44.

- (4) Saul Bellow, *To Jerusalem and Back* (New York: The Viking Press, 1976), p. 170. 以後本文中の引用のページは全てこの版による。
- (5) *Ibid.*, p. 18.
- (6) *Ibid.*, p. 66.
- (7) *Ibid.*, p. 78.
- (8) Saul Bellow, *Dangling Man*, (New York: The Vanguard Press, 1944), pp. 51-2.
- (9) *Ibid.*, p. 39.
- (10) *Ibid.*, p. 140.
- (11) *Ibid.*, p. 18.
- (12) *Ibid.*, p. 40.
- (13) *Ibid.*
- (14) Saul Bellow, *Henderson the Rain King* (New York: The Viking Press, 1959), p. 77.
- (15) *Ibid.*, p. 84.
- (16) *Ibid.*, p. 83.
- (17) Saul Bellow, *Seize the Day* (Harmondsworth: Penguin Books, 1966), p. 70.
- (18) Saul Bellow, *Henderson the Rain King*, *Ibid.*, p. 212.
- (19) *Ibid.*, p. 79.
- (20) *Ibid.*, p. 284.
- (21) John Hollander, "To Jerusalem and Back," in *Saul Bellow*, Harold Bloom, ed., (New York: Chelsea, 1986), p. 100.